『教行信証』（坂東本）の総合的研究のための基盤構築

《総目次》

緒　言　加来雄之

『顕浄土真実教行證文類』（坂東本）の特徴についての予備的考察
——専修寺本・西本願寺本との比較を通して——　藤元雅文

『教行信証』の構成——各巻の位置について——　廣瀬　惺

方法としての『教行信証』（坂東本）——「正信念仏偈」解釈の試み——　加来雄之

「此の」顕真実教の明証なり——晩年の改訂からみる親鸞の課題——　後藤智道

『教行信証』における親鸞の歴史観　マイケル・コンウェイ

恵信尼文書の用語　金子　彰

緒　言

研究代表者　加　来　雄　之

本研究班は、「『教行信証』（坂東本）の総合研究のための基盤構築」という研究課題のもと共同研究を行った。「基盤構築」という研究課題の性格と、また一年間という限られた研究期間であったこともあり、真宗大谷派蔵『顕浄土真実教行証文類』（以下、『教行信証』（坂東本））を総合的に研究するうえで、どのような課題設定が可能か、またどのような解釈方法が有効かなど、総合的研究に向けて、いくつかの分野から、これまでの研究史の問題点を整理し、新たな研究の可能性を探ることが中心となった。いわば総合的研究のための研究基盤にいくつかの支柱を打ち込む作業に着手したに過ぎない。

そもそも『教行信証』（坂東本）とはどのようなテキスト（文献）なのか。そのテキストとしての特徴が、『教行信証』研究、もしくは親鸞思想の研究、中世日本仏教の研究においていかなる方法論的な意義を有しているのだろうか。先学の研究によって知られるように『教行信証』（坂東本）は、親鸞の真筆本かつ手沢本という貴重な文献的特徴を有しており、その中には親鸞思想の原点と展開を示唆する情報が埋蔵されている。その意味で、『教行信証』（坂東本）は、さまざまな親鸞の思想解釈の可能性、それのみならず親鸞が生きた日本中世仏教の実態を解明するための情報を含む鉱脈である。おそらく、この鉱脈からは無数の鉱石を掘り出すことができるであろう。しかしすぐれた鉱石もそれを利用するためには製錬する技術が不可欠であるように、『教行信証』（坂東本）にどれほど文献的特徴に彩られたさまざまな思想

の営みが記録されているとしても、それらはそのままでは鉱石でしかない。つまり『教行信証』（坂東本）から親鸞の思想的営みと課題を抽出するためには、ぜひとも解釈の方法が必要である。それは同時にこれまでの『教行信証』研究の歴史を検証し、そのなかから不純物（『教行信証』の本質を隠してきたかもしれないある種の研究的手法、たとえば時代的風潮を反映した構造的理解（科文）や「西・鎮・今」というような宗派イデオロギーによる比較研究など）を取り除くという精錬という作業も含むことになろう。私たちの『教行信証』研究や『教行信証』の文献的特徴への注目が、そのような負の役割を果さないとはいえないからである。

『教行信証』（坂東本）の文献的特徴が有する思想的意義を明確にするために、私たちは、坂東本を方法論的概念として鍛え上げなくてはならないと思う。しかし『教行信証』（坂東本）の文献的特徴を方法論的概念にまで鍛錬するためには、どのような手続きが必要なのであろうか。先述したように文献的特徴が分っただけでは方法論として用いることができない。文献的特徴がどのように思想的解釈に有効なのか、もしくは有効でないのか、を検証する必要があるのである。

そもそも中世日本の宗教文献である『教行信証』（坂東本）を解釈するとはどのような営みであるべきなのであろうか。われわれは研究の立場や方法論の点検から出発しなくてはならない。その目的の一つは『教行信証』（板東本）の文献的特徴を解釈の方法論的概念として検証することである。そのために次のような課題が想定されるだろう。

（1）そもそも『教行信証』（坂東本）とはどのようなテキストなのか。『教行信証』（坂東本）の『教行信証』諸本中における位置を確定し、それが有する文献的な特性と課題を明確にしなければならない。またそれが親鸞の他の諸著述の中においてどのような地位をもつかを明確にしなくてはならない。

（2）『教行信証』における思想解釈についての検討が必要である。まず『教行信証』の構造論的視点が問われなくてはならないであろう。そのうえで、教、行信、回向、仏土、歴史観などの主要な概念が考察されなくてはならな

い。坂東本を方法とすることによって、どのような思想解釈の可能性が開かれるであろうか。

（3）『教行信証』（坂東本）は中世日本の宗教文献としての特徴をもつ。つまり時代と社会のなかにおけるさまざまな視点からその解釈の可能性は問われなくてはならない。たとえば日本中世の宗教状況、『教行信証』の国文的用法、圏点の問題、宗教的文献としてのレトリックなどである。

本研究班では、『教行信証』（坂東本）研究の課題と可能性を探るという課題のもと、諸分野の研究者による研究発表を行った。その目的は、発表を通して『教行信証』（坂東本）を読解し解釈する上での方法的問題を共有することであった。本研究班の研究員および研究班が依頼・招聘した研究者が、共同研究の一環として学術学会、公開研究会および研究員による共同研究会において行った（その一覧は『研究所報』57号に掲載済みである）。

今回は、それらのなかから以下の六点を成果として紹介したい。

研究員の成果としては、『教行信証』坂東本の文献的特徴と課題に関わるものとして、二〇〇九年七月二十二日の共同研究会の発表に基づく藤元雅文氏（大谷大学専任講師）の論文を、また『教行信証』の構造的理解に関わるものとして、三月十七日の公開研究会における廣瀬惺氏（同朋大学教授）の講演録と、および二〇〇九年十月十八日の共同研究会の発表にもとづく加来雄之（大谷大学教授）の論文を掲載する。藤元論文は、坂東本の文献的特徴を専修寺本・西本願寺本の比較を通して考察するものであり、廣瀬論文は『教行信証』六巻の有機的な構造についての論述であり、加来論文は「正信念仏偈」の構造的理解の可能性を検証したものである。また後藤智道氏（二〇〇九年度は大谷大学大学院博士課程在学）とMicheal Conway氏（大谷大学任期制助教）は、本研究班の研究期間中、協力員として研究活動に関わった。この二名は、二〇〇九年九月八日に開催された日本印度学仏教学会の第六〇回学術大会における特別部会「親鸞研究の可能性」において発表した。後藤論文は、それに関連する研究成果をまとめたものであり、坂東本の「教巻」の改訂に注目した考察

である。マイケル・コンウェイ論文は、二〇〇九年六月に龍谷大学において開催された第一四回国際真宗学会学術大会において本研究班が企画したPanel 3 “Possibilities and Problems in Kyogyoshinsho Research” での発表 “A Double Take on History: The Degeneration of Buddhism and Historicity of Salvation in the Kyogyoshinsho” の日本語訳に対して加筆・訂正したもので、『教行信証』における歴史観を論じている。また金子彰氏（東京女子大学教授）は、本研究班が親鸞遺文を国語学の視点から検討するために本研究班が招聘し、二〇一〇年一月八日における公開研究会で「親鸞遺文の国語学的研究から」というタイトルで講演したが、今回の金子論文は、親鸞の妻である恵信尼の語法について新たに書下ろしたものである。

金子先生・廣瀬先生には、研究会で懇切なご指導をいただいただけでなく、ご多用のなかにもかかわらず、玉稿を賜ることができました。紙面を借りてお礼を申し上げます。